KENMIN NO AYUMI
令和3年5月号
No.621
2021 5

県民のあゆみ

山形県広報誌

「釣り」と「ワーケーション」を組み合わせた「庄内浜釣りケーション」を発信している皆さん。地元自治体や企業、そして県とも連携しながら、二拠点居住や副業なども視野に入れた新しいライフスタイルを提案しています。
（撮影協力：由良自治会活性化委員会、海テラスゆら）

P.2 県民の皆さまへ 新型コロナウイルス感染症関連情報
P.4 特集 令和3年度当初予算について
P.8 奏であう人 若者たちに学びと成長、生き抜く力を
P.16 やまがた伝説 さくらんぼ

山形県広報誌 令和3年5月号
県民のあゆみ
5 No.621
奇数月1日発行 編集発行◎山形県広報広聴推進課
〒990-8570 山形市松波二丁目8番1号 ☎023-630-2534
表紙題字｜山形県知事 吉村美栄子
県ホームページアドレス https://www.pref.yamagata.jp/

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

やまがた伝説 DENSETSU

どうして山形県はさくらんぼの生産日本一なの？どでかい新品種も登場？

「さくらんぼ」は収穫した果実を言い、「おうとう」は学術用語で樹木と成っている実、「チェリー」は加工品や輸入物とおおまかに区別して使われています。山形でさくらんぼの栽培が始まったのは明治8年。全国で育成が試みられましたが、実らせることに成功したのは本県とその周辺だけでした。雨に弱いさくらんぼにとって、山に囲まれ6月の降雨が少ない山形の環境が非常に適していたのです。その後、さくらんぼ栽培は県内で普及し、今では全国生産量の約7割を占める「さくらんぼ王国」になっています。

佐藤錦は県内栽培の約7割を占めるさくらんぼ界のトップスターです。生みの親は、東根市の佐藤栄助氏。16年もの歳月をかけて生食用品種として育成しました。佐藤錦の栽培が拡大したのは、缶詰の需要が下火になり生食用品種に転換し始めた昭和40年代から50年代にかけて。雨除けハウスの普及もこれに拍車をかけました。山形県は、大正元年以降※、さくらんぼ生産日本一であり続けていますが、現在も2位以下を大きく引き離す牽引役が佐藤錦なのです。

※ 昭和18～23年は戦中及び戦後の混乱期のため統計データなし

佐藤錦の誕生後も、様々な品種が生まれました。爽やかな甘さの「南陽」、甘酸っぱく赤い果肉の「紅さやか」、甘みとしっかりした果肉が特長の「紅秀峰」、大粒で濃厚な味わいの「紅てまり」、果汁が多く早生の「紅ゆたか」などなど。そして、今、期待の大型新人が「やまがた紅王」です。艶のある紅色が鮮やかで、500円玉よりも大きい大玉は食べ応えも抜群、令和5年の本格出荷に向けて注目を集めています。

さくらんぼについてお話をお聞きした
村山 秀樹 さん
山形大学農学部 教授

山形県の年間さくらんぼ産出額は360億円以上、果樹園への観光客は約50万人もあり、その経済波及効果は計り知れません。豊かな食文化に恵まれた山形のなかでも、米に次ぐ農産品として、大きな期待が寄せられています。